

令和元年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第59巻11月号(通巻724号)

風土

創刊60周年記念号



くわりん

南うみを

上賀茂神社 五句

夏惜しむ櫓の小川に足浸し

涼新たな社家の土橋に佇めば

をさなごの秋の木漏れ日踏み飽かず

はつあきの加茂の焼き餅かうばしき

瀬の音の沁み入る扇置きにけり

ちちろ虫ちらしつ畝の草を抜く

稲刈つてキヤタピラの傷深々と

寸断の藁が刈田を埋め尽くす

芒野に畦のふくらみありにけり

名月へ捨て田の芒活けにけり

秋日傘沖を見つめて動かざる

「風土」六十周年

桂郎と器のくわりんてのひらに

山毛櫟峠

林 いづみ

長命寺

対応の涼しき僧の古刹振り
青嵐東高野と呼ばれもし
菩提樹の花や奥へと石畳
清瀬
蛩草咲き初むサナトリウム跡
外気舎の十葉明りにアルマイト
木下闇出发点より二歩三歩
グリーンライン
峠またとうげと越える新樹かな
名にし負ふ万緑に句碑山毛櫟峠

緑 風

小林 共代

参道の夏雲かくす杉木立
鬼来迎へ急く山道の草いきれ
蟬のこゑ和讃緒の声となりけり
夏木立借景として「迎講」
幔幕の「鬼」の一文字ひかた吹く
夏燦々舞台に光る清め塩
出番待つ化粧懇ろ衣紋竹
手作りの面の艶やか緑さす

春の田

中根 美保

げんげ田や吹かれて殖ゆる花の数
田返しの跡山影に来て止まる
自販機を二つ置きたる春田かな
永き日の足洗ひ場に繩束子
クレソンの水細らせて群れにけり
端引いて縛れ解かむ蝮の道
竹秋や走れば揺るる山之路
山道に火伏せの札や鳥曇

花万朶

間島あきら

文学碑前を打ち継ぐ鼓草
鳥交る湖へ二本の滑り台
鳥雲に松に副ひたる句碑の形
係争の城址を裾に富士日永
一団の二人と犬は花粉症
折れ蓮の迷路を縫うて春の鶴
湖描く大きわん曲花降り
天を打つ囀り地には人の声

鎌倉夏へ

内藤 静

そのむかし縁切寺や梅若葉
内済はみくだりと半鳥雲に
善と禅修めて苔の花の墓
唐門を青き揚羽のひた登る
梵鐘のかくも閑かに麦の秋
たけのこを掘らないでください建長寺
流鏑馬のどよめき届く牡丹かな
たてがみの靡きなびくよ樟若葉

金蘭・銀蘭

鈴木 庸子

元号をつなぐ今年の桜かな
扁額の拈華微笑や春日満つ
風土軒桂郎居士は花吹雪
風光る磴へ迫り出す蛙句碑
青柳寺に生れて増えぬる目高かな
連翹の花の明かりや蓮清寺
師の墓へ導きくれし紋白蝶
面影を追ひ逝くステッキ・春コート

竹間集

若狭麦秋

浜 福恵

鳳梨山羽賀寺 六句

老杉の大緑蔭や辿り着く
梵鐘一打蓮の浮葉のうら稚し
堂暗く素足になりて参じけり
御光眩し蓮一輪の尊しや
微笑みの踝足で御座す観世音
山清水絶えぬ響きの山を辞す
農道を一直線に麦の風
遠景に送電塔や麦の秋

竹間集

花行脚

門伝 史会

艶やかに茶畠続く尾根若葉
山桜富士稜線に雲流れ
家康の城へ城へと桜東風
天守閣桜は空に湧いてをり
春光やかからくり時計能を舞ふ
絢爛の本丸公開花に酔ふ
川あれば沿ふ道のあり花筏
花吹雪両手拵げて歩みけり

月涼し

鈴木 石花

峠路のまくなぎ払ひ又はらひ
古利多き山あひの里田水沸く
茅葺の三門広し蛇の衣
招かれし大黒亭主の風炉点前
懐石の百膳並ぶ夏座敷
合飲の花墓の後ろを通りけり
四百年の糸檜葉確と木下闇
石庭の砂利白く踏み日の盛

薔薇の園

山田 暢子

薔薇のアーチ潜り至福と待ち合はす
試歩のごと薔薇の小径をさまよへり
白ばらの吐息か崩れおちるとき
薔薇の香に次々と顔寄せてみる
薔薇紅し誰もが同じ目をしたたり
黄の薔薇が主役かたへに撮られけり
佇みて屈みて薔薇と息合はす
カルメンの恋せし薔薇かこの真紅

大^お原^ば志^{らざし}

岩木 茂

一村をみどりの包む大原志
大杉の走り根うねる大原志
玉葱の太りだしたる大原志
令和の世の三日目となる大原志
鶯の声につづける祝詞かな
村長の太眉垂れて大原志
あくびして嬰伸び上がる大原志
路地奥は川への階や河鹿笛

出熊 獵

小林 輝子

隙間なく玄き雪降る天仰ぐ
雪の古祠槍手狭みし山の神
春を待つ生きとし生けるものなべて
春待たでまたぎのあつ注 あつは嬬なりば身罷りし
獣籠る大樹ゆさぶり雪解風
四囲の山なべて隠るる雪解靄
奥羽嶺にこゑ落としつつ鳥帰る
出熊待つ漢ら集ふ仁右エ門家

日々雑抄

田村すゝむ

七草の名がすらすらと出てこない
立ち上る野焼の煙り火の起伏
瞳を合はす事なし段の雛たち
春風に乗り遅れたり忘れ花
田水張る夕日背中の水明り
人絶えて闇を豊かに蛍とぶ
暗がりには皮脱ぎ散らす今年竹
琅玕の色をして仲ぶ今年竹

大^お原^ば志^ら
原^ざ志^し

田中佐知子

大原志天一位なる菊の紋
女坂白藤の香に歩をゆるめ
葺替の成りし絵馬殿大原志
春志や菖蒲の藍の引き締まる
龍頭に神の水汲む夏羽織
春志の色濃き炊き込みご飯かな
「山ふぐ」てふ刺身蒟蒻大原志
春志の宮より産屋よく見えて

花の時

中村 洋子

真間山の弘法寺へゆく花の時
踏切りを渡り切つたる雀の子
ひとつ買ふ真間二丁目の桜餅
五・六歩の真間の継橋亀の鳴く
仁王門仰ぎてをりぬ花衣
寺に入り桜大樹に声を呑む
立ち位置は伏姫桜真正面
風生と同じ空なる紅枝垂

洛中逍遙

橋添やよひ

漢字ミュージアム 三句

漢字にも「国字」「方言」風光る
逝く春の名前万葉仮名で書き
占ひの甲骨文や山笑ふ
黄鐘おうじきの音も朧なる妙心寺
朧夜や薄墨桜の香炷かな
機音の減りし西陣つばくらめ
西陣や落花の浮かぶ染殿井
滑り出す令和元年楠若葉

家島行

浅田 光代

夏空へまつしぐらなる波しぶき
高速船の揺れむずがゆき五月かな
採石の島しらじらと青葉潮
夏潮に置かれたやうにガット船
初夏のオノゴロ島へ降り立ちぬ
渚ゆく滴る山をすぐ横に
潮焼の漁師やひたに網繕ふ
H O P E の空箱が浜昼顔のうへ

日比谷公園

柿沼 盟子

皇居から続く万緑日比谷へと
出勤の列に逆らひ麦の秋
郷土の木五つ欠けをり夏の蝶
水を浴ぶすずめや鶴の噴水に
百十六年経し公園の青嵐
日を浴びてビールフェスタは撤収中
太き蜂音なく移る薔薇深紅
青芝に影を落としてへリコプター

都道府県と政令指定市の木

鯉 幟

高村 令子

山鳩や日照雨の走る芽吹山
雀来て人来て庭の日脚伸ぶ
体内の水濃くなりぬ新樹光
ちらちらと古里が見え夏木立
葉桜やぎつしり詰まる予定表
たんぽぽや不足の思ひ泣き暮らし
命濃くなりぬ 全山若葉光
万緑の底を縫ひゆく峪の川

滝となる

土井 三乙

先頭は水車のあたり花筏
行く春のうぶすなの空鳶の空
妻にいまも幼友達花林檎
春惜しむ妻と窓辺に山を見て
花は葉に水の流るる音のして
ポケットの多きがよろし更衣
夏シャツにジーンズの裾折り返す
すぐそことふ結構な距離遠郭公

夏 燕

谷田明日香

探梅やなぞへにひづめ跡深し
鹿垣の中よりぬつと梅が枝
山々のぼうぼうけぶる雛かな
荒々とけやまきの角芽風の中
くれなゐの極まりきつて椿落つ
めん鶏のしきりに菜花つつきをり
鳥の羽根散らばつてゐる春の泥
雄雉のひと睨みして蛙駆くる
先代に祝詞似てきし春祭
総代の背広ぶかぶか春の雲
入り婿のはや酔いつぶれ春祭
揺れ合うてもたれて露のしゅうとめよ
鷺鴉引き連れ畑を打つてをり
春の泥散らしつバイク蛙を来る
つちふるやゆるゆるのぼる田の煙

花びらをあつめては吹く童女よ
雨音のゆるび出したる夕蛙
葱坊主大きくなつて疎まれて
山の霧吹きはらはれて朴の花
縦横に田水にごして通し鴨
腰高く蛙草を刈る媪かな
蛙草でぬぐふ泥靴苗運び
なだめつつ田植機言ふことをきかす
犬が鼻押しあててゐる余り苗
初成りの胡瓜かならず太短
猿除けの綱くぐりぬけ胡瓜挽ぐ
丑三つの闇を引き裂きほととぎす
たそがれにほのと浮きたる立葵
夏燕万年稲架の並び立ち

すまいる学級

中嶋 陽子

「すまいる学級」五十六名若葉風
春日の射す二時間目「聞く・話す」
椅子下に膝抱ふる子花ぐもり
青嵐つねつて叩いてつば吐いて
五月雨や教室の椅子がたがたす
梅雨深し拳にギユツと縫ひぐるみ
でで虫や登校しぶり一步前へ
前髪を自分で切つて更衣
二十分休み草笛吹きに来る
校庭を駆け整列の夏帽子
白南風や親子ゲームのハイタッチ
水平に嵩見て削るかき氷
かき氷舌べろの赤見せ合うて
ソーダ水男の子の喧嘩両成敗
夏休みの宿題ホチキスの歪み

夏旅の話二学期始まりぬ
青虫やエリック・カールの虫眼鏡
秋の蚊と男の子個室に逃げ込みぬ
靴下の模様ちぐはぐ蚯蚓鳴く
教室に子ども新聞秋の空
放課後の職員室の青蜜柑
小春日や通し稽古の声透る
答案の裏にらくがき窓に雪
泣きじゃくり完走する子牡丹の芽
風船バレー声掛けトスシアタックし
「まあいつか」切り替へ上手梅の花
順に持つ子ども包丁春の雨
卒業式近づく教室の余白
卒業の一人ひとりに贈る文
「すまいる賞」の札一二三鳥雲に

山河集

同人作品



南うみを選

スカイツリーの片蔭東京の秒針 中嶋 陽子

朝夕の母への電話かなかなかな
母の腕取りて重たし片かげり
立秋や桐箱に入る化粧筆
新涼や観光ガイドの青き服

吊革に残暑の貌のつらなれる 川田 好子

秋の灯のもれくる家路やすらけし
長き夜や夢に思ひもかけぬ人
朝顔やラジオ体操かかさず
ペン皿に無患子二つ振れば鳴る

舟つなぐロープは固し今朝の秋 瀬戸 薫

桐の花壁画は人を寄せつけず
伝言を簾の掛ける海の家

虫時雨孫に教へる墓碑の場所
二の腕を夏手袋の這ひ上がる

秋風の雷門をくぐりけり竹 生田 勝次
いぼむしり野外授業の輪に入りぬ
モデル撮影を遠目に花野ゆく
気まぐれな梢の風や竹の春
てふてふの如く露草吹かれをり

熊野古道・藤白神社

池田 光子

千年の涼風放つ楠大樹
蜻蛉のついと付きくる熊野道
落蟬を通り過ぎゆく靴あまた
かなかなのしみ入る柳の実を拾ふ
莫塵ばかり大きく見えて地蔵盆

風土独語／南 うみを



スカイツリーの片蔭東京の秒針 中嶋 陽子

この句の面白さは尖塔形の「スカイツリー」の蔭を秒針に、東京の都市を時計に見立てるところです。書かれてしまえばなるほどと頷かされます。真夏の「片蔭」はくっきりとしていますので、より鮮明です。見立ては大胆に使いましょう。

処暑の風両手広げて受けにけり 森高 武

この句は風に両手を広げただけの所作ですが、季語の「処暑」がまことに作者の心情を伝えていきます。「処暑」は八月二十三日ごろですが、現実にはまだ暑さが残っているかもしれません。しかし作者は吹いてくる風に微かな涼しさを感じているのです。俳人ならではの感覚です。

吊革に残暑の貌のつらなれる 川田 好子

私たちは、真夏の暑さよりも、秋になって続く暑さの方がたえます。暑さへの疲れがピークになっているからです。吊革に貌を連ねているのは、疲れ切った通勤のサラリーマンたちです。

盆踊達磨に手が出足が出て 岡本 尚子

この句は「達磨に手が出足が出て」をどう読むかにかかっています。「達磨」とありますから、お寺の境内での盆踊でしょう。まず寺に掛けられた「達磨の絵」が、踊りにむずむずと手足を伸ばし始めたと読めます。あるいは達磨のように座り込んでいた人物が浮かれて踊りに加わったとも読めます。楽しい世界です。

桐の花壁画は人を寄せつけず 瀬戸 薫

「桐の花」と「壁画」の取り合わせです。桐は十メートルにもなる高木で、花は遙かに仰ぐ感があります。「壁画」も近づきたいイメージがあり、この二つを「人を寄せつけず」で繋ぎました。

鬼やんまの眼八月十五日 石井 秀一

「八月十五日」は終戦日であり、盆でもあります。いずれも死者の魂と深く結びついています。それに「鬼やんまの眼」を取り合わせました。あの大きな眼がこの日を睨み据えて、記憶に刻みこもうとしているかのようです。

てふてふの如く露草吹かれをり 竹生田勝次

高野素十に「秋水に蝶のごとくに花藻かな」という句があり、この句にも通じるものを感じました。風の「露草」を青い蝶の乱舞と喩えたところに詩があります。

門火焚くあなたの知らぬ孫四人 渡辺 やや

「あなた」は作者の亡き夫のことです。お孫さんと門火を焚くのですが、いずれも夫の亡き後に生まれています。歳月を噛みしめながら、亡き夫に語りかけるのです。

風土集



南うみを選

とんぼうの群れの留まる先は海 いわき

森高 武

雲厚く海を閉ざしぬ秋の風

真青なる朝顔五つ外は雨

処暑の風両手広げて受けにけり

秋茄子高貴な色の並びけり

盆踊達磨に手が出足が出て 相模原

岡本 尚子

身延山

階は残暑の高さ修行寺

朝顔をかぞへ園児の列過ぐる

桃の種割る青年の真白き歯

ジャニーズの団扇で陣痛応援す 神奈川

石井 秀一

病葉のしきりに落つる終戦日

鬼やんまの眼八月十五日

朝顔の花の減りゆく空の藍

雲になほ昇る勢ひ秋暑し

久久に軽く浮く雲秋燕 東京 中嶋 陽子

一刀に大玉西瓜爆ぜにけり

プレハブの校舎に水を撒きにけり

コンビニにぬるき水買ふ終戦日

舞妓行く片蔭の濃き町屋かな 宇治

蕎麦つゆに茄子の煮浸し山の里 宇治 渡辺 やや

門火焚くあなたの知らぬ孫四人

帰省子のふるさと訛もう失せて

帰省子の鼻歌調子外れかな

景品は出目金ビニール袋にて 高槻

六車 佳奈

盆参り僧侶の足の速きこと

黙禱のさ中秋蟬鳴きやみぬ

秋茜ふはり着地の線路かな

もいつこと伸びる吾子の手青蜜柑

空耳にママと呼ぶ声秋の風